

神社建築の表現手法を理解する美術科授業実践の報告

—— 巖島神社（茨城県銚田市子生（ほこたしこなじ））を例として ——

井上 朋美*・向野 康江**

(2012年9月15日受理)

Clues to the ITSUKUSHIMA-Shrine in Ibaraki Prefecture:
Researching Teaching Material for Appreciation of the Construction of the Shrine.

Tomomi INOUE and Yasue KOHNO

キーワード：神社，文化財，建築，鑑賞教育

これまでに学校教育機関では、日本国内や世界の文化遺産、そしてより身近な地域の文化遺産が教材として取り入れられてきた。特に地域資源として、社会化教育や地理教育などの教科を通じて行われる傾向が強い。本稿では、美術科教育の立場から、身近な寺社仏閣建築物を鑑賞授業の教材とすることを試みた。その地域資源としての活用の意義を示すため、執筆者（井上）にとって身近な地域である、茨城県銚田市子生（ほこたしこなじ）の巖島神社、通称子生弁天を取りあげることとした。そして、茨城県銚田市立旭中学校の第2学年を対象として、美術科授業の鑑賞授業を計画、実践した。実践授業のために行った教材研究、および授業計画、またそのために見出したアプローチ方法や、授業の改善点を考察した。美術科教育における建築物の文化遺産の活用、そして各教科の枠を越えた、横断的な学習活動へのさらなる発展に期待をしたのである。

はじめに

1. 本研究の動機と目的

文化遺産とは、人類の文化的活動によって生み出された建造物、遺跡、美術品、音楽、演劇などの有形・無形の文化的所産のことを示し、文化財とも呼ばれている。文化遺産は、

*茨城大学大学院教育学研究科

**茨城大学

それを遺した人々の育んできた歴史を如実に物語り、現在を生きる人々の未来の指針ともなる重要な役割を担う。今日、全世界には数多くの文化遺産と呼ばれる文化的価値の高い遺構が遺されている。日本においても様々な文化遺産が遺されており、独自の法律や条令によって保護されている。

これまでに学校教育機関では、日本国内や世界の文化遺産、そしてより身近な地域の文化遺産が教材として取り入れられてきた。特に地域資源として、社会化教育や地理教育などの教科を通じて行われる傾向が強い¹⁾。そして、平成 18 年(2006) 12 月 22 日の教育基本法改正を受け、平成 24 年(2012) 4 月 1 日施行の中学校学習指導要領(以下、指導要領)には、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する内容が盛り込まれた。これにより文化遺産は各教科において、その活用が期待できるようになった。さらに文化遺産を通して、各教科の枠を越えた横断的な学習活動への発展にも注目が集まっている。指導要領における美術科教育では、文化遺産を鑑賞教育教材として取り上げることが目標に掲げられている。

では、美術科教育における文化遺産とは何を示しているのだろうか。指導要領にはその対象となるものの詳細は記述されていない。そこで、前途の文化遺産の言葉の意味を確認すると、その中に美術品が含まれていることがわかる。よって、美術科教育における文化遺産には、絵画や彫刻などの美術作品や、その国独自の伝統技術が凝らされた作品などが示されているのではないかと推測できる。しかし、地域資源としての活用を期待したとき、それらの美術品から地域性がどれだけ見出せるのかは、教材化する対象となる美術品や教員の技量、実践する地域によって大きく変化するのではなかろうか。特に問題視すべきなのは、美術作品から地域性を見出すとき、それは作者の出身地であったり、その地域独自の材料や手法であったりという観点に留まってしまう恐れがあるということである。その場合、地域性はその美術品を理解する手がかりにはなり得るが、美術品を構成する要素の一部を美術科授業で共有しているにすぎず、必ずしも本質に迫ることができているとは言いきれない。美術科授業として何らかの教材化ができたとしても、美術科という教科枠で行った意義がどれだけ見出せるかは未知数である。日本国内や他国に遺された美術品の文化遺産は、それぞれに文化的価値の高い特徴があるけれども、必ずしも美術科教育に期待される地域性を所持しているとは限らない。

文化遺産の言葉の意味に立ち返ると、建造物が最初に挙がっていることが確認できる。建造物とは、建造された物を示す広義の言葉であり、家屋・倉庫・橋・船などが含まれている。建造物は、建造された時代や地域の歴史、人々との関わりを深くもつため、それらとの関わりなしには存在し得ない。それ自身にあらゆる文化的価値を含んでいるという建造物ならではの特徴は、美術科教育のみならず、各教科の枠を越えた横断的な学習活動への発展が大いに期待できる。そして建造物の中でも注目すべきは、家屋や寺社仏閣などの建築物である。それらは建造物の中でも、人々の生活に密接な関わりをもって存在している。特に日本の寺社仏閣建築物の造形面では、建立された時代に通有形として広まってい

た建築様式や、建築工法などが用いられているため、どの地域においても、ある程度共通した形式がみられる。しかし、通有形を用いながらも、地域の信仰や産業によって人々の関わり方も異なるので、その思いが地域性を生み、造形の個別性として表されることがある。

このような考えから、執筆者らは本稿の目的として、文化遺産の中でも日本の寺社仏閣建築物に焦点を当て、それらを対象にした地域資源としての美術科授業の鑑賞教材化を試みたい。そのために、身近な寺社仏閣建築物を対象とすることで、地域資源としての活用の意義を示すため、執筆者（井上）にとって身近な地域である、茨城県鉾田市子生（ほこたしこなじ）の巖島神社（以下、子生弁天）を取りあげることとした。そして、茨城県鉾田市立旭中学校の第2学年を対象とする、美術科授業の鑑賞授業を実践し、授業計画や実践の内容、またそこから見出したアプローチ方法や授業の改善点を考察することで、本稿のまとめとしたい。

2. 先行研究

先行研究には以下の文献がある。

- ① 加藤磨珠枝、「地域社会に根付いた鑑賞教育のケース・スタディ・メソッド—東京の神田教会を例として—」、『美術科教師教育学の研究』、大学教育出版、2007年、158～168頁。
- ② 川村善之、「鑑賞教育の複製資料 西洋建築について」、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』、第27号、京都市立芸術大学美術学部、1982年、70～75頁。
- ③ 白川哲郎、「日本文化史学科必修科目「文化財論」1年目（2001年度）の講義記録」、『大阪樟蔭女子大学学芸学部論集』、第40号、2003年、55～67頁。

以上の文献のうち①は、学校教育機関の鑑賞教育において発生し得る問題点を提示している。地域に根ざした教材選択の例として、東京都千代田区西神田の「神田教会」を取りあげ、アプローチ方法と授業構想が論じられている。しかし、鑑賞授業の対象学年や具体的な学習目標、鑑賞の観点が定められていない。実践も行われていないことから、これから多くの改善が必要となる内容に留まっている。②は、西洋建築物を例に取りあげ、建築物を対象とした鑑賞での必要条件、主に問題点について言及している。また建築物に反映される造形性にも注目し、風土との関わり・民族性の表れ・時代の特色・宗教的意味などの、様々な観点を設定できる可能性を述べているものの、中学生を対象とした美術科鑑賞授業の、具体的なアプローチ方法は見出されていない。③は、大学の講義における記録である。様々な文化遺産を活用し実見させることで、それらが有する意義や価値、また保護・伝承するための課題に向き合わせている。扱う文化遺産も様々で、有形・無形を問わず多々取りあげている。しかし、多数の文化遺産を一度に取りあげたことで、それぞれの教材化の意義が希薄になり、鑑賞の対象が文化遺産である必然性が欠けている。よって本研究の意義はここにある。

3. 問題の所在と課題考察

美術科授業の鑑賞の対象として、建築物が積極的に取りあげられることについて、多くの一般の日本人が好意的にとらえていることは、平成 23 年（2011）に執筆者（井上）が行ったアンケートの結果で明快であった²⁾。しかし、建築物は多様な教材化が期待できる一方で、教材化に伴う問題点が見出せる。

その問題点とは第 1 に、鑑賞授業を行う地域によって実現が難しいという点である。建築物を教材化するとき、その対象となる建築物を選択する必要がある。書店などで簡単に多くの資料が手に入るということを重視するなら、一般的に名前が知られている建築物が望ましい。また授業の中で、実物の建築物を見学に行く時間が設けられることが好ましい。しかし、そういった活動を容易に設定できる学校は限られている。そのうえ、各学校の授業時間数や教育体制などによっては、実現が難しい場合もある。蝦名敦子氏は、中学校における美術科授業の鑑賞教育が一定の形で取り入れられているとしたうえで、求められている内容をすべてこなすには時間数が足りず、全体的に網羅されているとは言い難いと論じている³⁾。

第 2 の問題点は、教材化するための基礎知識が、授業者が必要となるという点である。いかなる教科領域で教材化を試みるにしても、建築物を知るうえで歴史的背景への知識は欠かせない。重要文化財の指定を受けている建築物であるなら、どのような点に文化的価値があるとみなされているのか理解しておかなければならない。またある程度の歴史・地理的な知識が必要となるのは、学習者にも求められることである。

第 3 の問題点は、授業者が授業を構想するにあたって、その具体的なアプローチ方法が見出し難いという点である。アプローチ方法を設定するには、第 1 の問題点にあげた授業を行う地域や学校の状況、第 2 の問題点にあげた授業者の基礎知識の構築への配慮も必要となる。しかしそれよりもまず、「何を学習させるのか」を明確にし、設定した学習目標を学習者が達成できる方法としてのアプローチ方法を見出さなければならない。こういった諸々の問題があつて、建築物の教材化はそのアプローチ方法に工夫を凝らさねばならず、授業者の技量によって良し悪しが左右され易い。

第 4 の問題点は、建築物よりもまず伝統と文化の継承の教育について、授業者となる教員それぞれの思い入れに差があるという点である。建築物をはじめとした文化遺産を構成する伝統と文化は、我々の歴史が築かれてきた多大な功績をもっている。しかし、それが教科領域の枠に当てはめられたとき、その功績の重さが見えづらくなる場合がある。例えば建築物の場合、その造形に用いられる技能は技術科、建築物を護ってきた地域住民の取り組みは社会科、というような教材への活かし方が考えられる。理科や数学科の場合も不可能ではないが、教材化を行う授業者の技量が凝らされなければならない。凝らされない場合、建築物は伝統を直接学ぶ対象ではなく、ある数式や現象を導き出す手段としての役割に留まってしまう。

以上のように、建築物は多様な教材化が期待できる一方で、教員の技量やその地域によって、多くの問題が発生し易い対象であることがわかる。そこで執筆者（井上）は、地域の文化的価値の高い建造物を取りあげることで、これらの問題点の対処法を見出したい。そのために、自身にとって身近であり、文化的価値の高い子生弁天を教材化の具体例としてあげ、これらの問題点をどう解決することができるのかを考察する。

教材開発

1. 教材について

茨城県鉾田市子生にある巖島神社は、通称「子生弁天」「子生の弁天様」と呼ばれている。子生弁天の本殿は、昭和43年（1968）に茨城県の重要文化財に指定された建築物である。創建年代は承暦2年（1078）、広島県宮島の巖島神社を勧請したと伝えられている。子生弁天の本殿は、江戸時代の寛文12年（1672）に焼失した後、元禄10年（1697）に再建され、延享4年（1743）に改装された記録が残っている。本殿に施された装飾彫刻には龍や獅子、獏などが意匠として表されており、そこからは改装当時の表現手法が感じられる⁴⁾。神社周辺では、子生弁天を安産成就や子授成就の神として奉り、現在も信仰している。地域には、子生弁天に参拝したことで、子宝に恵まれたという女性の昔話も存在している。地名である子生が「子を生す」と書くことから、その信仰の深さが読み取れる。また弁天（弁才天）は、海上神の市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）と同一視されることが多い。海上安全や大漁祈願の神として、太平洋沿いに位置する子生の巖島神社においても、古くから信仰があった。子生弁天の本殿に、弁天の化身であり水神の象徴でもある龍の彫刻が表されていることは、市杵嶋姫命の海上神としての信仰に関わりがあるとも考えられる。



図1-1：子生弁天（本稿執筆者（井上）撮影、※以下同。） 図1-2：子生弁天・本殿※

2. 子生弁天の鑑賞方法

子生弁天の本殿は、色彩・造形の工夫、地域の人々の信仰の様子・関わり方について独自の特徴が見出せる。執筆者（井上）は、子生弁天に表されている特徴を、①造形的観点、②地域資源的観点、という2つの鑑賞の観点を設定した。そして、2つの観点ごとに鑑賞

ポイントを設け、具体的なアプローチ方法を見出すこととした⁵⁾。以下に、その観点を記す。

(1) 造形的観点に立ったアプローチ方法

①色彩の構成を分析する鑑賞

建築物に用いられている色彩を分析し、その構成による効果を理解する鑑賞方法である。子生弁天本殿においては、いたる所に朱色の彩色が施されている。また、神社境内は鎮守の森と呼ばれる森林によって囲まれており、その深緑は年中変化することはない。この本殿の朱色と鎮守の森の深緑は、補色の効果が期待されて用いられていると推測できる。子生弁天に限らず、多くの神社建築物に共通して用いられている色彩構成だからである。ただし、子生弁天の建立に携わった人々の想いが明確に示されていない以上、補色効果の期待は当方の憶測でしかないことをことわっておく。

このように、この鑑賞方式は色彩の構成による効果が、もともと期待されて建立されたかが分からないという事態が多いものの、神社建築物には、その様式として日本全国に広まっていた通有形が定められているのは確かであろう。よって色彩構成も、その通有形に則ったものであると解釈できるので、おおよその色彩の構成には共通の意味解釈ができると考えられる。



図 2-1 : 子生弁天・本殿の朱色の彩色※



図 2-2 : 子生弁天・鎮守の森と朱色の鳥居の補色※

②造形様式を分析する鑑賞

建築物に用いられている造形様式に着目し、それに含まれる意味を理解する鑑賞方法である。神社建築物は、一般的な家屋にはない独自の部材、建築様式が用いられる。それらには何らかの意味が示されている場合がある。例えば、子生弁天の本殿の屋根は入母屋造りと呼ばれる様式が用いられている。この様式は、現在も一般の住宅にも用いられる屋根の様式である。

子生弁天の屋根の造形に、なぜ入母屋造りが用いられているのか、その理由が明確にならないことについては、色彩の構成を分析する鑑賞の際にも述べた。しかし、ここでも神社建築物の通有形の存在があることを考慮すれば、今となっては不明確になってしまった意図、つまり建立に携わった人々の想いが仮に明確に示されていないとしても、それが表された理由はある程度決定されるのではないだろうか。



③ 図像学・記号学を分析する鑑賞

建築物の細部様式に注目し、その造形に表されている意匠を分析することで、それらが示す図像学・記号学を理解する鑑賞方法である。子生弁天においては、まず本殿の向拝社の一木造の竜の彫刻に注目できる。竜は水神の象徴とされ、海を示す意味ももっている。竜の彫刻の細かな造形に注目すると、左右の竜が表す阿吽の口の形は物事の始終を示し、3本の爪は、中国の場合皇帝以外を示す。また、拝殿から本殿を繋ぐ丸い橋は太鼓橋と呼ばれ、丸い形が渡り難さを示すことから境界を表すとされる。神が渡るともいわれる橋であるので、神橋とも呼ばれる。竜の彫刻および神橋は、各地の神社建築において広く用いられている意匠であるので、鑑賞方式としては成立し易いと考えられる。

この鑑賞方法では、その図像や記号の示す意味が、細部様式を成り立たせた文化基盤によって変化するため、日本国内による解釈に必要な文化基盤を、あらかじめ確認しておく必要がある。

(1) 地域資源的観点に立ったアプローチ方法

① 地域性を分析する鑑賞

建築物の所在する地域状況が、建築物にどのような影響を与えているのかを分析することで、表されている地域性を読み解く鑑賞方式である。例えば子生弁天においては、所在する銚田市（旧旭村）が東に太平洋、西に北浦、北に涸沼という、水に囲まれた地域であることから、古来から水産業が盛んであった。市杵嶋姫命や竜の彫刻に込められた、海上神としての信仰は、銚田市の地域性と深く結びついていると考えられる。

② 時代の特色を分析する鑑賞

建築物に施された細部様式を分析し、そこに表されている時代の特色を明らかにする鑑賞方式である。神社建築物には、各時代に通有形として広まっている様式が存在し、その様式は徐々に変化している。つまり神社建築物の細部様式には、建立された時代の特色が示されているということである。子生弁天においては、本殿に華やかな装飾が施されていることが一番の特徴と言える。これは江戸時代中期に建立された寺社仏閣建築物に多く見ら

れる特徴でもある。江戸時代中期には、多くの美術品にも豪華な装飾が施され、一般民衆にも広く親しまれるようになったものの、寺社仏閣建築物においては、幕府や諸藩の財政が悪化していたことで、寺社の造営が困難になっていた。そこで各寺社は、寺社仏閣建築物を華美に装飾することで、一般民衆へからの信仰を深めようとする傾向があった⁶⁾。子生弁天においても、延享4年(1743)に改装されたときに、竜の彫刻などの装飾彫刻が施されたという。このように装飾彫刻に着目し、江戸時代中期の寺社仏閣建築物を通して、当時の日本文化の在り様を理解することができる。

3. 子生弁天教材化による問題点の解消

前途の考察の段階で、建築物は多様な教材化が期待できる一方、教員の技量やその地域によって、多くの問題が発生し易い対象であることが分かった。ここでは自身にとって身近であり、文化的価値の高い子生弁天を対象とし、それらの問題点をどう解決することができるかを考察し、教材化の手掛かりとする。

まず第1の「鑑賞授業を行う地域によって実現が難しい」という問題点に対しては、実物を見せることはできなくとも、リアリティのある映像資料を用意できるという、身近な建築物ならではの解決策がある。鑑賞の観点が定まっていれば、それに対応する独自の映像資料を準備することが可能なので、観点に応じて的を絞った充実した鑑賞が期待できる。子生弁天については、子生弁天の鑑賞方法で述べた、「図像学・記号学を分析する鑑賞」および「地域性を分析する鑑賞」によって鑑賞の観点を定めたい。よって、竜の彫刻に着目するアプローチを行いたいのであるが、しかし、美術科授業の時間内に、その実物を見学に行くには、旭中学校と子生弁天は距離的に不可能であった。やはり徒歩で片道一時間はかかる。そこで、執筆者(井上)があらかじめ本殿を撮影し、プロジェクターで映し出すことで、実際に見学にいったときのような体験ができるよう工夫した。また、座席によってプロジェクターの映像が見え難い場合、学習者への配慮として、写真をA4判に引き伸ばしたものをグループごとに配布することによって、この問題の解消を試みた。

次に第2の「教材化するための基礎知識が授業者が必要となる」、第3の「授業者が授業を構想するにあたって、その具体的なアプローチ方法が見出し難い」という問題点に対しては、授業者が何を教えたいのか、まず目標を明確にもつことが重要であった。授業の目標が定まれば、それを達成するための対象となる建造物がもつ文化的価値を分析することが、授業者にとっての基礎知識の構築の第一歩となる。鑑賞授業でのアプローチ方法も、その周囲から見出せばよいと考える。つまり、有効なアプローチ方法を見出すためにも、分析を行う中で、建築物と地域との関わりを探る資料を収集する必要があるわけで、身近な建築物を対象とした場合、書店や図書館での資料収集の他にも、地域の人々から話を聞く・地域独自の地域資料を手に入れるなど、建造物との関わりが深いからこそ手に入られる資料もある。特に子生弁天の場合は、安産成就や子授成就に関する子生弁天の昔話や、海上安全や大漁祈願に関する地域の水産業などが存在し、地域の人々と産業、子生

弁天への信仰が密接に関わっていることがわかる。それらの信仰の内容は、執筆者（井上）が格別注目させたい内容、すなわち竜の彫刻が施されたきっかけともなっている。よって、教材研究の際に、周囲と子生弁天の関わりを分析することから、授業者となる執筆者（井上）自身の基礎知識を深めることができると予測できた。アプローチ方法においても、子生弁天を取り巻く周囲の関わり、つまり地域資源的観点から迫っていくことが重要だと捉えられるわけで、それは学習者と子生弁天との関わりをも範疇に含み、ごく自然な導入が行えるという利点がある。

そして第4の「建築物よりもまず伝統と文化の継承の教育について、授業者となる教員それぞれの思い入れに差がある」という問題点については、各教科の枠に当てはめて授業が行われる現状では、教材と教科との距離により、教員それぞれの価値観が変わってしまうことも仕方のないことであるとも考えられた。しかしながら、学校教育において行われる教育は、「何を教えるか」が根本にあって行われるものであり、それに適した教材が常に選ばれ実践されるということが理想の形であるわけだから、あらゆる伝統と文化をあらゆる教材から見出し、美術科教育が担うことのできる役割と、他教科に託す役割との分別を図ることは、個々の教員の思い入れを超えて果たさなければならない学校教育での使命であると考えられる。子生弁天の教材化においては、前途の「(1) 造形的観点に立ったアプローチ方法」を美術科ならではの学習として、色彩や造形、そこに示される意味の鑑賞を設定する。さらに、他教科への横断的な学習を期待し、「(2) 地域資源的観点に立ったアプローチ方法」から地域との関わりに着目できる鑑賞を行うことでこの使命が全うできると信じる。

以上、前途で浮上していた問題点を解消する方法を探ることから、子生弁天の鑑賞教材化の具体的なアプローチ方法を見出すことができた。ここでの考察を踏まえたうえで、以下に研究成果の一部である実践で用いた指導案を紹介する。

授業実践

1. 授業計画

(1) 実践日と学習者の実態把握

実践授業は、茨城県銚田市立旭中学校で行った。鑑賞授業の対象学年は、第2学年の全3クラスである。実践日は平成23年(2011)12月16・19・21日の3日間、1クラスずつ、2時間続きの時間割で、実践授業を設定することができた。

地域の文化財としての子生弁天と、学習者の関わりは浅い。旭中学校では、写生会で描く風景のひとつとして加えていること以外に、学習内容や活動に子生弁天をとりわけ組み込んでいるといった状況でもない。ただ美術室の一角に、子生弁天を描いた油彩画が飾られているだけである。

(2) 鑑賞の観点

学習者たちはこれまでに、主に社会科の授業の中で、文化史として文化的建造物を学習してきたと考えられる。また一方で、日本の文化的建造物の変遷は、日本美術史の変遷との関わりも深い。そこで、美術科における美術史としての文化的建造物という点から造形的観点をもつ1時間、続いて社会科における文化史としての文化的建造物という点から、地域資源的観点をもつ1時間の、合計2時間の中で、2つの観点から生徒の理解や見方を深める鑑賞を行いたいと考えた。そしてそれらの知識を活かして、日本の美術文化への関心を高める授業を目指したい。

2. 指導案

第2学年 美術科学習指導案 平成23年(2011)12月16日(金)第3～4校時：3組
19日(月)第3～4校時：2組
21日(水)第1～2校時：1組
指導教生：井上朋美(指導教官：藤田洋美)

1 題材名 子生弁天と私たちの旭

2 題材について

茨城県鉾田市子生にある巖島神社本殿(以下、子生弁天。)は、昭和43年(1968)に、県の重要文化財に指定された建造物である。創建年代は承暦2年(1078)、広島県宮島の巖島神社を勧請したと伝えられている。本殿は江戸時代寛文12年(1672)に焼失した後、元禄10年(1697)に再建、延享4年(1743)に改装された記録が残っている。本殿の龍や獅子、獺などの彫刻からは、改装当時の表現手法が感じられる。また、地元では「子生弁天」「子生の弁天様」と呼ばれ、安産の神として現在も信仰されている。地名である子生が「子を^な生す」と書くことから、その信仰の深さが読み取れる。また、弁天は海上神の市杵嶋姫命(いちきしまひめのみこと)と同一視されることが多い。太平洋沿いに位置する子生弁天においても、古くから海上神としての信仰があった。子生弁天本殿に、弁天の化身であり水神の象徴でもある龍の彫刻が見られることは、市杵嶋姫命の海上神としての信仰に関わりがあるとも考えられる。

このように、子生弁天本殿は子生の地域的信仰や、江戸時代中期の神社建築の表現手法を強く反映しているので、生徒にとって身近な場所にある文化的建造物として、子生弁天本殿を鑑賞の授業の教材として取りあげることとする。生徒たちはこれまでに、主に社会科の授業の中で、文化史として文化的建造物を学習しているし、また一方で、日本の文化的建造物の変遷は日本美術史の変遷との関わりも深い。そこで本題材では、社会科における文化史としての文化的建造物と、美術科における美術史としての文化的建造物という、2つの観点から分析し、生徒の理解や見方を深め、それらの知識を鑑賞に活かし、日本の

美術文化への関心を高めることとする。

3 目標

- ・ 厳島神社本殿の竜の彫刻と、子生の地域的信仰との関わりを分析する活動を通して、文化財に感心をもつことができる。 (関心・意欲・態度)
- ・ 厳島神社本殿の龍の彫刻から、当時の表現手法を理解し、鑑賞に活かすことができる。 (鑑賞の能力)

4 計画(2時間扱い)

第1次 鑑賞

第1時 子生弁天の鑑賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間(本時)

5 本時の計画

(1) 目標

- ・ 子生弁天本殿に用いられた色彩・造形様式から、示される意味を知ろう。
- ・ 子生弁天本殿の竜の彫刻と、銚田市の地域との関わりを知ろう。

(2) 準備・資料

(生徒) 筆記用具、美術資料集

(教員) ワークシート、映像資料、プロジェクター

(3) 第1校時の展開

学習活動・内容	時間	指導上の留意点
<p>1. 本時の学習課題と授業の進行についての確認をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 子生弁天に用いられている色・形の意味を探ろう。 </div> <p><授業の進行></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第1校時では造形的観点から、第2校時では地域資源的観点での鑑賞を行う。 ・ プロジェクターの映像を見ながらワークシートを完成させる。 ・ 第1時および第2時の最後にはそれぞれの授業の感想を学習者に発表してもらう。 ・ 第2時では授業のまとめとしてテストを行う。 	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 座席はグループ班をつくり着席させる。 ○ 授業に入る前に本時のワークシートを配布し、プロジェクターがすぐ使用できるよう起動の準備と確認をする。(授業開始時には映像を映し出しておく。) ○ 子生弁天の映像を見ながら、学習者たちに厳島神社に行った経験・聞いた話などを発表させることで、その身近さを分かち合う。 ○ 本校時では子生弁天の信仰と子生の地域との関わりを知ることが目的となるため、プロジェクターの映像を見ながらワークシートを完成させることが重要であると示す。 ○ 第2時ではまとめのテストを行うことを伝え、映像とともにワークシートの内容を掴みながら記入していくよう指示する。
<p>2. プロジェクターの映像と解説をもとに、ワークシートに記入することで、厳島神社の分析をする。</p> <p>(1) 「鑑賞する」という言葉の意味を確認しよう。(空欄補充)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 鑑賞とは、造形作品や文学作品によって、作者が(表そうとしている)ことや、(感じ取ってもらいたいと思っていること)をつかみとること。 </div> <p>(2) クイズに答えて厳島神社の特徴をつかもう。(空欄補充)</p> <p>問1: 厳島神社の屋根の造りの名前は何でしょう?</p>	35	<ul style="list-style-type: none"> ○ プロジェクターに移した映像を見ながら、グループごとに問題を解いていく。その際、話し合いの時間は充分設けることとする。 ○ プロジェクターが見える位置にいることを確認する。見えづらいという学習者には座席変更の配慮をする。 ○ プロジェクターの映像が見えづらい、もう一度見たいという学習者のために、グループごとに配布していた写真資料を用いることを伝える。 ○ 鑑賞することの意味を確認し、これからの活動の指針とする。 ○ 発問によって生徒たちが気づき、グループ内で発表できるよう支援する。 ○ 生徒たちが気付いた内容の中で、造形的に何か

<p>問 2：厳島神社の橋が丸いのは何故でしょう？</p> <p>問 3：橋が赤い理由で間違っているものはどれでしょう？</p> <p>問 4：補色の関係になっているのはどの組み合わせですか？</p> <p>問 5：池に鯉がいる理由で間違っているのはどれだろう？</p> <p>問 6：池や鯉以外に、水を連想させるものはどれだろう？</p> <p>(3) まとめ (空欄補助)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>厳島神社は、(水)をイメージして造られたと思われる部分が多い。それは、厳島神社がまつている市杵島姫命(弁財天・弁天)という神様が、(水の神様)であるからだと考えられる。</p> </div> <p>(4) 授業を受けて感じたこと・考えたこと の反省・発表</p> <p>3. 本校時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート記入 ・まとめの話 ・次時の活動内容を確認 	5	<p>しらの意味を含むものについては、ここで解説を入れていく。</p> <p>○友達が発表した振り返りの内容を聞いて、本時の学習内容とこれまでの成果を振り返ることで、生徒自身の形成的評価の向上を図るようにする。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(4) 第2校時の展開

学習活動・内容	時間	指導上の留意点
<p>1. 前時の内容を振り返り、本時の学習課題の確認をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>子生弁天本殿の竜の彫刻と、銚田市の地域との関わりを知ろう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・前時のワークシートの確認 ・授業最後にまとめのテストを行うことを再度伝えておく。 	5	<ul style="list-style-type: none"> ○授業に入る前に本時のワークシートを配布し、プロジェクターがすぐ使用できるよう起動の準備と確認をする。(授業開始時には映像を映し出しておく。) ○前時で用いたワークシートを見返すことで、前時までの学習内容と本時の学習について確認をする。
<p>2. プロジェクターの映像と解説をもとに、ワークシートに記入することで、厳島神社本殿の龍の彫刻と地域との関わりを分析する。</p> <p>(1) クイズに答えて厳島神社と子生の関係を探る手掛かりを見つけよう。(空欄補助)</p> <p>問 1：どうして厳島神社は子生で必要とされたのだろうか？</p> <p>問 2：龍の彫刻は何故造られたのだろうか？</p> <p>問 3：子生の名前の由来に厳島神社が関係しています。その由来とは？</p> <p>(2) まとめ (空欄補助)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>子生は(水)に囲まれている地域である。そのために昔の子生では、(漁業)や(水産業)が盛んだったと考えられる。よって厳島神社の(市杵島姫命)の信仰が、子生の人々に必要とされたと考えられる。龍の彫刻は、(水神)ということが分かり易くなるように、(江戸時代中期)に取り付けられた。</p> </div> <p>(3) 授業を受けて感じたこと・考えたことを記入する。</p>	20	<ul style="list-style-type: none"> ○前時で確認した、子生の厳島神社と水との関係を意識させるため、水神の象徴である龍の彫刻に、鑑賞の対象を絞る。 ○気付いた特徴を積極的にグループ内で発表できるように支援したい。 ○発問によって学習者たちが気付き、発表できるように支援する。 ○龍の彫刻に彩色が施されていることや、造形が細かく印象が派手であることが、この彫刻が造られた江戸時代中期の特徴であるので、生徒たちがこの2点に気付けるよう発問に配慮する。
<p>3. まとめテストの実施、終わり次第授業アンケートを行う</p>	15	<ul style="list-style-type: none"> ○まとめテストの実施によって、前時と本時の学習の到達を確認する。 ○評子生の地域・信仰・歴史と厳島神社の関連を理解し、本殿の鑑賞に活かすことができたか。(テストの得点・ワークシート) Aへのキーワード：詳細かつ独自の解説 Cへの手立て：神社の説明文などを参考にさせ、厳島神社についての解説ポイントを見つけさせる。
<p>4. 本校時のまとめ</p>	10	<ul style="list-style-type: none"> ○友達が発表した振り返りの内容を聞いて、本時

・ワークシートおよび授業アンケートを提出する。	の学習内容とこれまでの成果を振り返ることで、生徒自身の形成的評価の向上を図るようにする。
-------------------------	----------------------------------------------

6 ワークシート

以下、授業で配布したワークシートを紹介する。ワークシートは1校時につき1枚使用し、2校時分の2枚を用意した。設問は、プロジェクターの内容と同じものである。

(1) 第1校時ワークシート

厳島神社と私たちの子生・1時間目

授業日： 2011年 12月 日

●学習目標●

1 「鑑賞する」という言葉の意味を確認しよう! ㊦()に当てはまる言葉を書こう。

鑑賞とは、造形作品や文学作品によって、作者が()ことや、()をつかみとること。

2 クイズに答えて厳島神社の特徴をつかもう!

㊦①～③の中から答えを1つ選び、解説を聞いて、()に当てはまる言葉を書こう。

問1：厳島神社の屋根の造りの名前は何でしょう?

①入母屋造り ②マンション造り ③京風造り

問2：厳島神社の橋が丸いのは何故でしょう?

①可愛いから ②渡りにくいから ③橋を強くするため

問3：橋が赤い理由で間違っているものはどれでしょう?

①目立たせるため ②魔除けのため ③腐りにくくする塗料が赤い

問4：補色の関係になっているのはどの組み合わせですか?

①拝殿の茶色・橋の赤 ②歩道の白・橋の赤 ③屋根の緑・橋の赤

問5：池に鯉がいる理由で間違っているのはどれだろう?

①龍を連想させるから ②子だくさんの願いを込めたいから ③橋本知事の指定

問6：池や鯉以外に、水を連想させるものはどれだろう?

①本殿の龍の彫刻 ②賽銭箱 ③拝殿の上についている大きな鈴

●まとめ●

厳島神社は、()をイメージして造られたと思われる部分が多い。それは、厳島神社がまつっている市杵島姫命(弁財天・弁天)という神様が、()であるからだと考えられる。

○授業を受けて感じたこと・考えたこと○

<p>.....</p> <p>.....</p>

(2) 第2時ワークシート

厳島神社と私たちの子生・2時間目

授業日： 2011年 12月 日

●学習目標●

1 クイズに答えて厳島神社と子生の関係を探る手掛かりを見つけよう!

㊦①～③の中から答えを1つ選び、解説を聞いて、()に当てはまる言葉を書こう。

問1：どうして厳島神社は子生で必要とされたのだろうか?

①流行 ②国が命令した ③子生が水に囲まれた地域だったから

問2：龍の彫刻は何故造られたのだろうか?

①可愛いから ②水を連想させたかったから ③木材が余っていたから

問3：子生の名前の由来に厳島神社が関係しています。その由来とは?

①子供がよく育つ ②子供がよく生まれる ③子供がよく働く

●まとめ●

子生は()に囲まれている地域である。そのために昔の子生では、()や()が盛んだったと考えられる。よって巖島神社の()の信仰が、子生の人々に必要とされたと考えられる。竜の彫刻は、()ということが分かり易くなるように、()に取り付けられた。

○授業を受けて感じたこと・考えたこと○

7 評価観点表

この授業は、鑑賞だけで成立する授業である。よって、評価の観点は、①美術への意欲・関心・態度、②発想や構想の能力、③創造的な技能、④鑑賞の能力、のうち、①と④の観点で評価を実施する。大きな評価観点大系において、④鑑賞の能力は、「知識の取得」に位置づけられるので、学習目標を①の観点において「積極的に巖島神社について知ろう」、④の観点において「巖島神社の特徴を理解し、鑑賞に活かそう」と定めたときに、以下の評価観点表が成立する。また、A、B、C の評価基準を設定し、各評価規準の達成度は、ワークシートおよび授業のまとめテストの得点によって判断する。

		評価基準		
		A	B	C
美術への意欲・関心・態度	積極的に巖島神社について知ろうとしている。	自分で鑑賞した巖島神社本殿に対する、詳細かつ独自の解説の作成	自分なりに巖島神社本殿を観察し、巖島神社本殿の写真解説を作成できる。	神社の説明文などを参考にさせ、巖島神社についての解説ポイントを見つけさせる。
鑑賞の能力	巖島神社の特徴を理解し、鑑賞に活かすことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・龍の彫刻と子生の水神の信仰との関係を考察し、鑑賞に取り入れられる。 ・龍の彫刻の特徴によって、制作時代の予想が立てられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・龍の特徴を見つけることができる。 ・龍の彫刻の特徴から、巖島神社本殿を鑑賞し、独自の意見を述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの設問へ記入することで、巖島神社の特徴を把握させる。 ・記入した内容から、鑑賞の手掛かりを見つけられるように支援する。

今後の課題

今回の実践において、学習者にとって身近な文化遺産である子生弁天を取りあげたことによって、多くの効果を実感することができた。その中でも特に、執筆者（井上）が効果的だと感じた点がある。それは、子生弁天が身近な神社建築物であるが故に、それに対する基礎知識が執筆者（井上）と学習者とで、同じ程度有すことができていたという点である。導入の段階で、子生弁天を教材として学習者に提示する際、あらかじめ何も認識することがなかったのなら、それがどのような神社として地域に存在しているのか、場所やその佇まい、周辺の様子まで詳細に説明する必要があったであろう。しかし、学習者は大まかな内容であったにしても、全員が子生弁天を知っていた。中には子生弁天の近所に住んでいることから、その神社の言い伝えを聞いて育ち、深い思い入れをもっている学習者も

いた。その点から、「身近である」という共通認識が、授業運営を円滑に進める根本的役割を果たしていた。また、造形的観点および地域資源的観点をもって鑑賞を行った際にも、学習者それぞれが構築してきた地域資源としての子生弁天の知識と、他教科で学んだ歴史背景とを関連させることができていた。まとめテストの結果にもそれが表れている。

しかし実践内容を改めて見直すと、課題提示の仕方や時間配分、アプローチ方法にまだまだ改善の余地がある。特にアプローチ方法では、地域資源的観点によつての鑑賞時間が短いように感じられた。導入で体験した全員の共通認識を深めることで、その先の鑑賞がさらに深まるようなアプローチ方法を、今後の研究で見出したい。

注

- 1) 菊地達夫「学校教育機関における地域資源の活用実態～北海道江差町を事例として『生涯学習研究と実践』北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要第4号, 2003年, 135-146頁.
- 2) 井上朋美『文化財を対象にした美術の授業における鑑賞教育教材の研究—茨城県内の墓股を中心にして—』茨城大学教育学部学校教育教員養成課程美術選修卒業論文, 2010年度, 10-15頁. 上記の拙論にて、茨城大学教育学部学校教育教員養成課程に所属している学生で、2010年4月から「図画工作科教育法研究」の授業を受講していた学生を対象に、「美術教育における、重要文化財（建造物）の授業に対するアンケート」を実施した。
- 3) 蝦名敦子「鑑賞授業における教材化の意味と論理—実践的研究を通して—」『美術科教育学会誌』, 美術科教育学会第29号, 2008年, 117-127頁.
- 4) 旭村文化財調査委員会『文化財 あさひ』(旭村教育委員会, 1975年) 2-3頁.
- 5) この方式を考えるにあたって以下を参考文献とした。向野康江『子どものための美術教育—学校での図画工作科教育と家庭でのART教育—』(弦書房, 2010), 61-70頁.
- 6) 太田博太郎 (監) 雲野良平 (編)『カラー版 日本建築様式史』(美術出版社, 1999), 101-104頁.

本稿を執筆するにあたって、実践授業の機会を提供して下さった茨城県銚田市立旭中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。また、数多くの資料を提供して下さった銚田市役所旭総合支所の皆様に、深く感謝申し上げます。そして、一級建築士という専門家の立場から、寺社仏閣建築物の工法を指導して下さった飯島常夫氏に感謝の意を表します。